

2009. 5. 20

No.156

編集 樋口 みな子

E-mail

minginga@agate.

plala.or.jp

郵便振替

「銀河通信」

02740-7-56535

(6号分1,000円)



リンゴの花が咲きました



5.18 青空にリンゴの花が映えて

5月、木々の緑が優しい、私の一番好きな季節を迎えています。ところどころに山ザクラのピンクが青い空に浮かんでいる姿や、春紅葉の柔らかなオレンジや黄色が、淡い緑にとけ込んでいる森を眺めていると気持ち安らぎます。

86歳の父が3月に倒れて近くの病院に入院。しばらくは母の介護は楽になりましたが、病状が良くならないままに5月16日、自宅近くの病院に転院になりました。朝、昼、夕の食事介助に母と私で行っています。そこにも1週間ぐらしか入院出来ないで、特養老人ホームなどを検討しています。歩くのが不自由でトイレに行けないのです。母も膝痛があり通院しながらの介護です。

元気で年齢よりはずっと若く見えた母ですが父との今後の事、介護の負担などからくる疲労で深いしわが刻まれていました。

リラ冷えに老いし母の背小さく見ゆ (みな子)

誰にでも老いは平等にやって来るのだなあと思えて考えさせられました。病院では長く置いてもらえずあちこち転々としなくてはならないのは患者にとっても家族にとっても肉体的、経済的にも負担が大きすぎます。質を落とさず、温かい介護支援を安心して受けられるようにならないでしょうか？私の代ではそうであって欲しいです。

昨年9月にさっぱりと枝刈りした我が家のリンゴの木に可愛い花が咲きました。裸になったリンゴの木に緑が甦りました。その姿にとっても元気づけられました。野幌森林公園も日々緑を濃くしています。オオバナノエンレイソウとエンレイソウが、饗宴していました。3人姉妹かな？面白いのでパチリ！



5.10 オオバナノエンレイソウ

田植えの季節ですね。群別岳を背に農作業です。(右写真・石狩市で)



エンレイソウ



5.17 水田に逆さに映った黄金富士(右)左に尾白利加岳、群別岳、幌天狗岳

浜益の山に魅せられて

幌天狗（1222m）・群別岳（1376m）・黄金山（739m）

3月20日、山の会のメンバー6人で石狩市浜益区の幌の果樹園前に駐車し、14時スキーで出発。浜益岳林道ゲートを抜けてから尾根にあがる林道がなかなか見つからず何度も地図を確認しながら進み、500m位の、風のあたらない場所にテントを張りました。2時から歩き始め、1時間半でしたが、私は数年ぶりの冬山泊まり装備で、肩と腰にずっしりとザックが重かったです。

満天の星に、翌日の山に期待いっぱいであつた。21日、シュラフ等はテントに置き、ビーコンチェックをして7時20分に出発。私はなんとか幌天狗まで行ってみたいと思いスキーの上手な3人と行動を共にしました。

トド松の密生した林と白樺林を登ると広い雪原になり青空がまぶしい。



黄金山をバックに



優美な山容の幌天狗

745m地点からは三角の優美な幌天狗が輝いていました。晴れてはいるが風は冷たく、高度を増すにつれて雪はクラストして1044mの厳しい斜面が壁のように立ちはだかっていました。ここまで3時間半です。

先日の遭難防止講習会を思い出し、私の力では無理と判断し下で待つことに。風の当たらないところで、



コルでテント設営

スキーのシールをはずしていると、ものすごい勢いでスノーモービルが3台、爆音を響かせて登ってきました。あれ、ここはスノーモービルは禁止区域でなかったの？とびっくりするやら、また雪崩を引き起こすのではと嫌な気持ちがしました。あまり上手？ではないのか1台だけはあの急斜面を登り切りましたが2台は登れず、まもなく下山しました。

二人の仲間と共に下山を開始。私はザックの重さと、刺さるような雪に、何度か転びながら、13時にテントに到着。テントを撤収し、果樹園前についたのは2時半でした。

浜益温泉近くから、憧れの群別岳が、鋭く天を突くように白く輝いている姿を目に焼き付け、2日間の山行を終えました。

山スキーで幌天狗手前までしか行けず、群別岳になんとか登りたいと思っていました。

前回の地図や行った人の記録などを何度も読み、5月4～5日と1泊2日でメンバー5人で行ってきました。

群別岳はポンクンペツのアイヌ語に由来し小石のある危ない川というような意味のようです。

幌の果樹園終点が浜益岳林道の入り口です。車2台を駐車し1時15分登山開始。ゲートを抜け80m先の右尾根にあがる林道を忠実に登りました。渡渉が心配でしたが、小川で難なく渡り、ややすると笹藪になり重いザックにひっかかり大変。林道は雪がすっかり消えて歩きにくいことこの上なし。2時間で520mの広い雪原に出ました。天気もいいし、眺望のいいところまで登ろうと頑張り、C745にテントを張りました。

私のザックで13kg位。Tさんのザックは20kgはあったと思います。浜益御殿が目の前にどっしりとありました。ここまで4時間でした。

翌日も快晴。前日の重いザックの疲れか、3時起床予定が1時間も遅れ、カウどんの朝食をとりサブ



浜益御殿をバックに

ザックに代えて5時半に登り始めました。

疎林帯を超えると見晴らしが良くなり、正面に幌天狗の優美な山容にシャッターを互いに押しあい小休止としました。最初の難所が壁のように立ちはだかる急斜面です。雪崩斜面を避けて、左の急斜面を登り10mの藪を超えてC1025に到達。すさまじい藪にめがねを跳ばされた人あり。みんなで探しましたが見つからず帰りに探そうということに。幌天狗に8:05着。目の前に天を突く堂々たる群別岳が圧巻。空の青さと岩と雪のコントラストの荘厳な美しさに皆、声もなくみとれていました。

ここでアイゼンをつけ、左右に切れ落ちたナイフリッジを恐る恐る下る

3ページに続く



穂天狗頂上からの群別岳

も雪が腐って雪崩の心配もあったので引き返すことにしました。9:25。

忠実に来た道を歩きテント場に11:35着。テントを撤収しそこから2時間で登山口14:15に着きました。

4月19日に同じコースを歩いたAさんの山行記録、こがね山岳会の渡辺千明さんの浜益10山が参考になりました。ありがとうございました。



ナイフリッジを恐る恐る歩く

後日、友人のEさんから電話をもらいました。「3日に群別川側からこがね山岳会の方たちと日帰りで登ったのよ！」道案内があればこそですが到達できなかったのがちょっと残念な山でした。

再度、挑戦してみたいです。



オオサクラソウ

友人のEさんのお誘いで5月17日、黄金山に登ってきました。神主さんによる安全祈願祭が興味深かったです。供物の意味と並べる順序が決まっています中央が一番手のかかったお酒、左から川魚、米、右にお餅など10種類の供物が供えられました。

黄金山は、アイヌ語でピンネ・タイオルシペ（木原にそびえる雄山）と言われ、堂々たる風格で屹立してとても目立つ山です。

2時間足らずで登れる山ですが胸つき八丁の急登はなかなか厳しいです。南暑寒別岳、尾白利加岳、群別岳、幌天狗が一望できました。



5.17 黄金山の山開き
神主さんによる安全祈願祭を行いました。

快晴の羊蹄山（1898m）

4月3日、青空が朝からまぶしい。京極登山口、9:20出発。メンバーは5人です。コースは京喜茂コース。広い雪原を歩き、砂防ダムのところから森林限界の地点で大休止してランチタイム。

そこからは、余市岳と先日登ったポント山も小さく見えました。目標は目の前に見える1396mのポコ。やがて厳しい登りとなり、雪もだんだん堅く



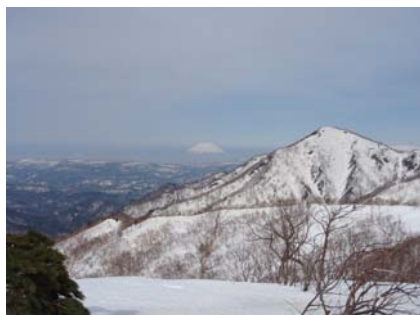
なって、眼下を見下ろすとめまいがしそうな高度感でした。これ以上登っても下りが厳しいとのAリーダーの判断で1350m地点までとしました。13:15着。無意根や、余市岳、ホロホロ山、徳舜瞥山が一望に。眼下に広がる京極の町や、広い平野に流れる尻別川がのびやかです。

降りれるのだろうか？と不安もいっぱい。斜滑降を繰り返して難所を突破しました。緩斜面も、モナカ状の雪で何度もつんのめって転倒。ようやく砂防ダム地点にたどり着いた時はホッとしました。そこからは気持ちのいい大平原を滑って15:40着。

見上げると羊蹄山の真ん中に太陽があり荘厳でした。



眺望の山 狭薄山（1296m）



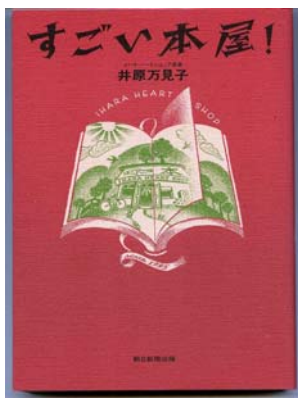
1197mピークからの
狭薄山 遠くに羊蹄山が見える

5月3日、つぼ足でメンバー5人で登りました。堅雪というよりはズボズボと抜かるところも多かったです。今年雪解けがいつもの年より早いですね。

真簾沼までは順調に進み、ここからコースを外れて1197mピークの縦走路のコルに着きました。そこからは急登をあえぎながら登りピークに。三角錐の狭薄山が美しい。

1時間もロスをしてようやく山頂に到着。静かな狭薄山からの眺望は素晴らしく札幌近郊の山々、羊蹄山、恵庭岳、漁岳など360度の大展望に感激でした。

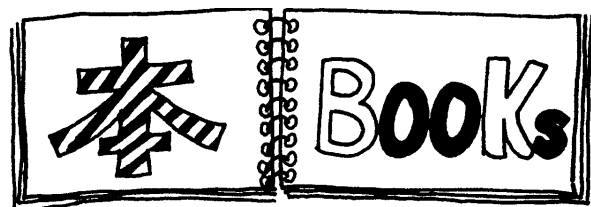




「すごい本屋！」

井原万見子著

朝日新聞出版 1680円



和歌山県の日高川町（旧美山村）の山の中に小さな本屋さんがあります。村になくてはならない存在の本屋さんの店主、井原さんの奮戦記です。

人口2200人、近隣の集落は100人ほど。伯父夫婦が経営していた本屋を継いだ井原さん。本屋の名前がユニークです。イハラハートショップ。そこには本だけでなく日常雑貨や味噌、醤油なども売っているのです。山の中の本屋さんは、お年寄りにとっては命綱でありコミュニティセンターの役割も果たしているのです。

開店時間だけ本屋をしているのではありません。井原さんは次々とイベントを企画。学校での選書会、児童文学の読み聞かせの会、絵本の原画展、絵本作家の講演会やサイン会など。こんな事、都会に住んでいたって滅多に巡り会えません。これらの企画を出版社に直接持ちかける行動力がすごいです。こつは関心のある編集者を覚えておき、直接交渉するそうです。井原さんの本を愛する気持ちが伝わってきます。

和歌山県版の朝日新聞に、「ようこそ！山の本屋へ」や日高新報に「小さな田舎の本屋通信」などを連載。たくさんのミニコミ誌やマスメディアにも紹介されて、出版界でも有名な存在のようです。でもそこで驕らないところが井原さんのすてきなところ。農業を営む町民が多いので店内には農業書もあります。インターネットでの注文も。売れるとFAXで知らせるなど、出版社の営業の方や編集者たちとの人脈を広げて行きます。彼らとの交流が次への企画へと発展して行くのが楽しい。

札幌市内でも小さな本屋が大型店に押されて次々と閉店しています。気に入っていた本屋が無くなるのは残念でなりません。この本を読んで、遠くに行くことは出来ないけれど「ずっと続けて」と応援したくなりました。

本と親しみ、原画まで見ることのできる日高川町の子どもたちは何と豊かな時間を持っているのでしょうか。こんな本屋さんが各地にあったら、子どもたちは本好きになるのではないのでしょうか？

「森林と人間」 —ある都市近郊林の物語

石城謙吉著

岩波新書 700円

苫小牧の演習林を歩いたことがありますか？小川のせせらぎ、森の柔らかい緑、野鳥がさえざり市民が憩う都市林です。

本書は石城先生を中心として、北海道大学の苫小牧地方演習林を都市林として再生させ、市民の憩いの場とした30年近くの試行の記録です。同時に森の生態研究のフィールド作りも行ってきました。

石城先生は動物生態学者から林学へ。既成観念に囚われない斬新な改革を次々と行っていきます。

明治以来のトドマツ・カラマツ一斉植樹を中止し、林業を人間と自然の共生圏の再現をめざす技術と考へ、実行に移しました。暗かった森は明るく美しく蘇り、多くの市民が憩うようになりました。

エピローグに「私の苫小牧地方演習林における23年間の活動を支えたのは、市民、研究者を含むたくさんの人たちとのつながりだった。そして今後も、大勢の市民、大勢の研究者に囲まれている限りこの森は護られていくと私は思っている」とあります。

たくさんの人たちのつながり。私もその一人でした。演習林の中で何度か、自然保護の会合を持ったことを懐かしく思い出しました。この本をきっかけにお元気な石城先生のお姿を新聞紙上などで拝見できるようになったのも嬉しかったです。

各地で森づくりが行われていますが、苫小牧のような都市近郊林のある所は少ないと思います。こんな森づくりならやってみたいと思うのは私だけではないと思います。



砥石山のサンカヨウ

我が家の庭のサクランボの花



「小林多喜二」ー 21世紀にどう読むか

ノーマ・フィルード著

岩波新書 780円



小林多喜二が書いた「蟹工船」が、若い世代に共感を呼び売れているそうです。私も読みました。

過酷なカニ漁や加工作業を強いられる労働者たちがストに立ち上がる姿を描いた作品ですが、派遣切りで労働者の権利が守られない現代の状況とよく似ています。

本書は、「世界と向き合う作家へ」「銀行員からプロレタリア作家へ」「小樽から東京へ」の3部構成から成り、著者は全作品、書簡、日記を丹念に読み、多喜二を知る人の証言から多喜二の29歳の生涯と作品を浮きぼりにしています。

著者は日本人の母と米国人の父との間で生まれ18歳まで日本で暮らしました。現在はシカゴ大学で日本文学を教えています。

特に力を入れて書いているのは、政治と文学の問題に関して。「文学は、芸術は、それ自体が目的であるべきだ」という近代が構築した思想に対して、多喜二が確信していた「芸術は世界に立ち向かう力を養う空間でもあり得る」という考え方に著者が共感して論を進めていることです。

多喜二は社会変革を目指しながら、文学もあきらめない。人々の心をとらえるものが絶対必要だと考えていたのではないかと著者は書きます。「蟹工船」が古くならないのは、人を引きつける力があるからだとも思います。人物描写が生き生きして、劣悪な環境で働く、労働者の怒りと悲しさが胸に迫ってきます。

多喜二は銀行をクビになって上京するのですが、同僚たちの証言は温かい。非合法の活動をみんな知っていながら、同僚の全員が別れを惜しんだ様子が語られ、人間的魅力にあふれた人物であったことが彷彿としてきます。多喜二に思いを寄せる人々の描写に引き込まれました。聞き取った著者が一緒になって共感している姿が見えるようでした。

著者は小樽文学館に展示されていた一通の手紙に強い印象を受けたとあります。多喜二の恋人、酌婦だった田口瀧子に宛てた手紙には「瀧ちゃんが、決して今後絶対に自分をつまらないものとか、教育がないものとか、と思って卑下しないこと。瀧ちゃん位利口な人は僕は本当のところ知らない」。この手紙に強い印象を受けて多喜二の世界を検証することを決意したとあります。

わかりやすい文体で、遠い世界の人だと思っていた小林多喜二が、実はとても人間好きな人だったことを知り、身近になりました。

エピローグに「多喜二さん、私はここからお礼をいいたい。あなたは全身の力をふりしぼって、文学と社会変革をともに求めたことに対して、です。人はだれでもあなたのように本気で生きてみたいと、一度は思うのではないのでしょうか」と。真摯に生きた多喜二への最大のほめ言葉が心にしみました。



「思い出のイトムカ」

イトムカ水銀鉱山閉山40周年記念文集編集委員会編

1700円（送料込み2000円）問い合わせは木村玲子さん
電話011-563-7867へ。

北見市と旭川市を結ぶ、石北峠のふもとにあったイトムカ鉱山はかつては東洋一の水銀鉱山と呼ばれました。

1973年に閉山し、全国に散ったかつてのイトムカ住民。地元の学校の同窓会名簿を頼りに原稿依頼し、52人が文章を寄せた記念文集です。

銀河通信の読者でもある木村玲子さん（元高校教師）が編集発起人です。木村さんの父は鉱山会社の職員でした。中学時代までイトムカで暮らしました。

イトムカ鉱山で働いていた人たちの子供の世代、勤務していた人々、学校の先生たち、遺稿になったが鉱山の所長、戦時中に一時働いていた人などが寄稿し、イトムカ鉱山の歴史と風土がさまざまな視点から綴られていて貴重な資料になっています。

イトムカの凍てつく夜空に見たオーロラ、おやつとして食べたマタタビ、ヤマブドウ、グスベリ、カリンズ、オンコの実、キイチゴなど。貧しくとも豊かな自然や、助け合った暮らしなどを懐かしむ思いがにじみます。また鉱山職員の子だった人は「会社は業績の好、不況にかかわらず、従業員の子弟にたいし、その時々に来る最善の教育支援をしてくれた」と書きました。今の企業の冷たさと比べて、働く人々を大事にした会社が地域社会を守ったことを知りました。

当別町に住む蓑島キミさんは、木村さんらの聞き書きで、戦前、イトムカで働いていた朝鮮人や中国人の労働者のことを証言しています。炊事担当だったキミさんは、食べ物を飼い葉桶の所に置いたり、自分の着物や布団を解いて服に作り直してやったりしたというのです。監視の目がある中で勇気ある女性がいた事に救われる思いがしました。



「ようこそ 花の夕張岳へ」ユウパリコザクラの会編

1500円（送料別） 問い合わせ 水尾君尾さん
TEL 0123-52-3306へ

スキー場計画から夕張岳を守ろうと発足したユウパリコザクラの会が、この4月に20周年を迎えました。夕張岳の素晴らしさを多くの人に知ってもらいたいと記念誌を発刊しました。5月10日には記念誌発刊を祝う集いが夕張であり、私も会員の一人として参加しました。

本書は3部構成で「夕張岳の豊かな自然」「コザクラの会の誕生」「未来へ向かって」から成り、研究者や、連携した市民運動の仲間や、コザクラの会会員、高山植物パトロール員など62人が文章を寄せています。

学術的に貴重な高山植物の宝庫である夕張岳は、市民の反対運動でスキー場開発から守り、さらに1996年には国の天然記念物に指定されました。その1年後に高山植物大量盗掘事件が起きました。コザクラの会は運動の手を休めることなく今日に至っています。

スキー場計画が持ち上がった当時、夕張に住んでいた新井さんは、ユウパリコザクラの会のネーミングのいきさつを書いています。当時の夕張タイムス社の記者の発案だったとか。夕張岳のシンボルである名前はソフトでやさしく、多くの人々の心をとらえたように思います。

私も中2から高3まで夕張で過ごし、夕張岳は初めて登った山でした。当時はバテてはならないと、JR通学を早起きして、1時間歩いて足を鍛えての登山でした。夢中で登ったので足下の高山植物は記憶にないのに、変化に富んだいい山という印象はずっと心の中にありました。スキー場計画が持ち上がった頃から、私も山に引き寄せられるように夕張に通うようになりました。

多くの方が夕張岳の魅力を書いています。もっとすてきだと思ったのは、市民運動を通してつながった輪の大きさです。行政をも巻き込んでの学習登山や、講演会、音楽会等、いつも手作りの温かさに、知らず知らずに私もはまっていました。

夕張岳を代表する高山植物の花々のグラビアが美しく、さまざまな活動を伝える写真が満載。立崎ひかりさんのダイナミックなタイトル、イサジ コウさんの表紙版画が緑豊かな夕張岳を表現して私たちをようこそと誘っているようです。

「奇跡のリンゴ」 「絶対不可能」を覆した農家 木村秋則の記録

石川拓治著 NHKプロフェッショナル仕事の流儀制作班＝監修

「この本面白いよ」と夫から手渡されたのが本書です。

農薬を使わずにリンゴを育てる。それが木村さんの夢でした。その夢を実現するまでに20年の歳月を要した話は新聞の広告欄でも見えていましたが、読んで、驚き、感動しました。

農薬を使わないために、大量の虫と病気がつきリンゴは実りません。収入はなく預金も底をつき、家族7人が貧乏のどん底に。それでも家族は黙って見守ったというのですから絆の強さにも助けられます。

農薬以外のあらゆることをやり、成果を上げることが出来ない木村さんはある日、岩木山に登って死を決意します。その時、見た光景がスクスクと育っているドングリの木でした。虫や病気がドングリを食い尽くさないのか。雑草が生え放題で土はふかふかでした。大きな発見でした。

木村さんは著者に語ります。「リンゴの木は、リンゴの木だけでは生きているわけではない。周りの自然の中で生かされている生き物なわけだ。人間もそうなんだよ。人間はそのことを忘れてしまって、自分独りで生きていると思っている」。この言葉は深く重い。

草は生え放題の木村さんが作るリンゴは、とても甘いそうです。今では全国のレストランや、個人から予約がいっぱいとあります。農薬を使わないリンゴは、農家からも問い合わせが殺到しました。石の上にも3年、とはよく言いますがよくぞ20年も頑張り通したものとそのひたむきな生き方に惹きつけられました。

我が家のリンゴの木も農薬など撒いたことがないので虫食いだらけでした。毛虫だらけの時もあったのです。昨年、あまりにも枝を張ったナナカマドとリンゴの木の枝刈りをしました。その時の庭師さんの言葉を思い出しました。「お宅のリンゴ、小さいけど甘くて美味しいよ」。この本を読んで納得しました。美味しいから野鳥がたくさん来るんですね。

庭に目をやると、リンゴの花がつぼみをつけていました。雑草だらけの我が家のリンゴの木。今年も甘いリンゴがなるかしら。



映画



「ワルキューレ」

アメリカ ブライアン・シュガー監督

実話のヒトラー暗殺計画を映画化した作品です。

第二次世界大戦末期。ヒトラーが自らの安全を守るためにワーグナーの音楽の題を暗号

にしたワルキューレ作戦。この作戦を逆手にとってヒトラーの暗殺と、国内予備軍の発動までさせた将校たちの闘いがありました。

ドイツ軍のシュタフェンベルク大佐（トム・クルーズ）はユダヤ人の大量虐殺など、ナチスの残虐な行為に絶望。国を守るのではなく人間の命を守るのが将校としての責任だと考えるようになります。アフリカ戦線で左目を失い、ドイツに帰るとレジスタンスに身を投じます。

ヒトラーの側近をレジスタンス側につけ、ヒトラーの暗殺だけでなく、政権打倒後の新生ドイツの青写真までが想定されていたのです。

結果は分かっているにしても、息づまる攻防に思わず映像に引き込まれました。ナチス中枢部にいながら、良心に従って行動した人たちがいたことに敬意を払いたいです。シュタウフェンベルクは死を賭してヒトラーに抗議したのです。私もその生き方から勇気をもらいました。

アクションスターのトム・クルーズは怒りを胸に秘めた抑制した演技で別人のようでした。

購読料をありがとうございます。3.18～5.13(敬称略)

斎藤浪子(当別町)2000円(12号分)伊藤久次郎(田川市)5000円(カンパ含む)長谷川雄助(札幌市)3000円(カンパ含む)藤重千秋(斜里町)10000円(カンパ含む)鎌田直子(市川市)5000円(カンパ含む)清水和男(福島町)古田寛昭(所沢市)2000円(12号分)反橋一夫(札幌市)3000円(18号分)京極紘一(札幌市)塩川哲男(札幌市)1668円分の切手 安川誠二(札幌市)3000円(カンパ含む)荻野慶博(旭川市)2000円(12号分)高柳昌央(文京区)3000円(18号分)赤石喜恵子(札幌市)2000円(12号分)山川陽一(多摩市)10000円(カンパも含む)津村康代(札幌市)10000円(カンパも含む)滝本幸夫(札幌市)10000円(カンパも含む)土屋繁(札幌市)2000円(12号分)宮原光恵(幌加内町)3000円(18号分)加藤多一(長沼町)2000円(カンパも含む)泉恵子(札幌市)鍋谷州春(名古屋市)10000円(カンパも含む)後藤言行(小樽市)3000円(18号分)安田治(札幌市)3000円(18号分)江部康雄(札幌市)2000円(カンパも含む)神原照子(登別市)仲俣善雄(札幌市)片山篤子2000円(12号分)市根井孝悦(函館市)2000円(12号分)安田成男(札幌市)三島春光(札幌市)2000円(12号分)佐藤民枝(札幌市)5000円(カンパも含む)伊藤恒雄・牧子(江別市)北川麻利子(札幌市)2000円(カンパも含む)木村玲子(札幌市)1240円分の切手で。笠井継夫(札幌市)2000円(カンパも含む)金額が入っていない方は6号分1000円です。 合計 119,000円は印刷と送料に使わせていただきます。ありがとうございます。1月と3月の購読料を合計すると185,000円になり、今年はなんとか安心して発行できます。ご協力ありがとうございました。木村玲子さんからは「思い出のイトムカ」の著書を頂きました。本の紹介をしています。資料としても優れた労作です。

発送を希望しない方はお知らせ下さい。パソコンからも読めます。無料です。
<http://briefcase.yahoo.co.jp/bc/ginganews150>



5.10ユウパリコザラの会20周年
記念誌発刊報告会で



5.9 野幌森林公園のキタコブシ

春の息吹と眺望楽しむ

快晴の本倶登山で春山スキー

江別市 樋口みな子

先月29日、快晴のボンクトサン（本倶登山、1009m、虻田郡倶知安町）に山仲間と登りました。7時50分出発。取り付きの急斜面を登り切るとなだらかな台地に出ました。500m付近で一休み。ここまで30分です。ここからの羊蹄山もいいですが、さらに進み「P620」はビューポイントです。エゾマツの大木が目印で、堂々たる羊蹄山が美しかったです。

ボンクトサンはアイヌ語で「小さな崖の山」？という意味でしょうか。なんだか宮沢賢治の童話に出てくるような名前ですね。雪が太陽に反射してキラキラ輝いていました。コゲラもドラミングしているし、雪の上に虫も動きだし、春の息吹を感じながら楽しく登りました。今回の企画は山仲間のお母さんが娘の頃、林業を営む祖父と登った山で、堅雪の頃、木の根掘り作業のために登ったのだそうです。ダケカンバの森の中を歩くと、目指すボンクトサンが前方に見えてきます。広い台地を快適に進み、頂上直下、大きく迂回すればスキーのまま登れそうでしたが、リーダーが斜面に亀裂を発見したため、危険な斜面を避けてつぼ足で登りました。11時半到着。羊蹄山、ニセコ山々、余市岳、無意根山など360度の眺望が素晴らしかったです。



4.29 ポンクト山頂上で 羊蹄山が雄大です。



残念だったのは静かな山にスノーモービルの爆音が鳴り響いていたこと。春の息吹に耳をすます楽しみを壊さないで欲しいですね。

ニセコ連峰を背に快調なピッチで登る 4月29日



陽春にマユミの種子が輝いていました。